

第6部

山岳信仰と宝満山



霊峰・宝満山

第6部 山岳信仰と宝満山

第1章	山岳信仰の考古学	菅谷 文則	279
第2章	考古学からみた宝満山信仰の始まり	小田 富士雄	283
第3章	宝満山の歴史と信仰	森 弘子	287
第4章	宝満山と古代大宰府	酒井 芳司	291
第5章	宝満山の最新発掘調査成果	山村 信榮	295
第6章	宝満二十五坊の姿	岡寺 良	299

第6部では、大宰府の北東（鬼門）に位置する宝満山の歴史と信仰を検討する。第1章では、「山の考古学」を中心に山岳信仰研究の動向と課題を整理する。第2章～第6章では、宝満山調査のはじまり（昭和30年代）から、平成25年（2013）の国指定史跡の指定にいたる調査と研究過程を、考古学・文献史学・民俗学という多角的視点から記し、今後の展望を明らかにする。

なお、第1章～第6章は、平成21年（2009）11月13日～12月20日に九州国立博物館・財団法人太宰府顕彰会が合同開催したトピック展示「祈りの山 宝満山」解説図録を再掲載（一部加筆、改変含む）したものである。



トピック展示「祈りの山 宝満山」ポスター

第1章

山岳信仰の考古学

菅谷 文則

1. 山の考古学

日本列島のおよそ70パーセントが山地である。海拔3788mの富士山を最高所とし、海岸までに、さまざまな山地が発達している。

地理学や地質学の区分では、単純に「山」を論じることは難しい。そこで生活感に立脚して山をとらえると、高山がある。富士山のように平地に屹立している山もあるが、多くの山は、山なみを形成して、その高く突出しているところを山と言っている。日本海岸から急激に高度をあげて、日本列島を横断するかの山脈を形成している立山連峰と後高山連峰は、一般には北アルプスと言われている。その山脈には3000mクラスの山々が連なっている。剣岳、立山、薬師岳、白馬岳、針木岳などがよく知られている。それらの著名な山々は各々平安時代以来の登山の歴史をもっているが、白馬岳のように平野部から農事暦の基準にもなる雪形といわれる雪田などの出現などでよく知られている山もある。両連峰が合わさる三股蓮華山から、さらに南下して槍ヶ岳、穂高岳へと高峰が続いている。槍ヶ岳と穂高連峰、五竜岳などに囲まれた上高地（古くは神高地とも表示されていた）では、明治年間に放牧場が設置されたこともあり、石鏃の検出が続いていた。現在では登山基地、日本有数の観光地として知られている上高地は考古遺跡でもある。

上高地出土の石鏃については松本平などで狩猟のために弓矢が使用され、大形鳥に射込まれた矢鏃が、ついに上高地で命つきて落下し、鳥の体は腐敗し、石鏃のみが残され出土したとされる。もちろん、このような可能性もあるが、古い時代とは言え、土器出土の有無を確認する必要がある。これは、もちろん、一種のないものねだりにすぎず、私たちが把握している山の考古学では、日本有数の高山も、その研究対象であることを指摘したい。分布調査、つまり踏査が必要なのである。その成果を示しておきたい。

それは山梨県と長野県の県境で、南アルプスの北端の名山である甲斐駒ヶ岳頂からの縄文土器の出土である。山の考古学研究会の櫛原功一氏が、『山の考古学通信』20号（2008年）に発表された「山頂から窟へ 山梨県内の研究動向」である。2599mの山頂近くを分布調査された成果である。2599mの山頂付近は現在では樹林限界を過ぎていて、狩猟にはむかない。狩猟はもう少し低海拔でなされている。この縄文土器はある意図をもって縄文人が登山していたことを示していると言ってよい。

海拔の低い山も居住や信仰の対象となった。また、旧石器時代から近現代遺物を山頂や山麓部にもつ山も多い。一例のみをあげるとすると、奈良県と大阪府にまたがる二上山をあげることになる。

二上山は、火山による山で、その基部は凝灰岩や安山岩の露頭も多い。火山活動によってサヌカイトを噴出しているので、その石材を旧石器人以来、弥生時代まで連綿として石器制作原石として用いている。このため、遺跡が形成されている。古墳時代をへて、飛鳥時代になると、仏教寺院が山麓に営造される。当麻寺、石光寺、加守寺、叡福寺などであり、終末期から初期火葬墓の墓所も多い。

いま、私たちが提唱し、実践している山の考古学は、このような二上山の山麓の遺跡群は含めてはいない。

この区分一線引は、やっかいな問題で、里山、低山、高原、高山などの区分は、一般的に水田農耕による集落形成がなされている地点は、それが高海拔の土地であってもそこは山の考古学の対象ではない。

しかしながら、奈良盆地や琵琶湖を巡る500～1200mの海拔の山嶺は、人が日常的に農耕などを行

う集落地以外は、山の考古学の対象である。

古代以来の三輪山信仰、琵琶湖畔の三上山信仰などはそのことをよく示している。もちろん、三輪山の禁足地の松茸株が経済的側面をもって発行されていたこともあったが、それは日常的農業的経済行為ではなかったとしてよい。

2. 山の考古学と、祭祀考古学、仏教考古学、山岳修験学考古との関係

大場磐雄が提唱した神道考古学は、近年はその晩年の弟子である梶山林継によって「祭祀考古学」という名称で活動を続けている。神道の用語は鎌倉期に編述された『神道要語集』まで、用いられていなかったことが改称の理由である。もちろん、『日本書紀』にも、神道の単語があるが、今日の神道の用語とはまったく一致しない。

仏教考古学では、石田茂作によって大きく提唱され、現在も延用されている。キリスト教圏では、キリスト（教）考古学の用語も古くからあり、ともにある宗教の教理と、その普及の状態を知ることによって主眼を置いている。ところが、遺跡と遺物は、ともに普遍性と凡要性をもっている。極端な一例を想像してみると、次のような状況さえ出現する。

日本の織豊期に多くの宣教師が来航し、布教に努めた。その結果として十字（十字架）をモチーフとする器物が多く日本で制作され、あるいは海外から持ち込まれた。これが発掘調査あるいは偶然の機会に出土することがある。この場合、その場所を十分に考証しないと、それはキリスト教自体の『場所』からの出土となってしまう。時には珍奇なものとして珍重され、あるいは弾圧の道具（例えば「踏み絵」用の器具）であったかもしれない。仏教も同じである。昭和40年代ぐらいまでは、古代瓦の出土地を寺院跡とすることが多かった。ところが、地方の国衙、郡衙、時には駅家にまで瓦が使用されていることが発掘調査の進展とともに明らかになってきた。以前の瓦は仏教という概念の修正が必要となった。この概念は平安初期以来の、忌み言葉である『寺』を示す『瓦葺』あるいは「僧」を『あららぎ』などすることから来ているようである。

山での遺物や遺跡をただちに、仏教と神道に区分することはなかなか困難である。なかでも、8世紀初頭の神仏習合思想の開始以降は、両者の区分はきわめて難しくなる。

瓦に戻ると、奈良県の山寺である室生寺の江戸時代後期以前の建築ではまったく瓦を使用していなく、平安後期の『粉川寺縁起絵巻』に描かれている初期の観音堂も瓦葺ではない。昭和40年代以前の仏教考古学が瓦の出土を重視しすぎていたので奈良時代寺院の縁起流記資財帳に記す雑舎群の認識や調査を進展させなかったのであろう。

山と関係の深い修験についても、修験的解釈が中心となるので、修験の資料が増加する11世紀以前を、正しく認識することができない。従前の奈良県大峯山（金峰山）の研究においても、11世紀以前には研究の及ぶことはなかった。また、山形県山寺立石寺の研究においても円仁金棺入定窟にとらわれすぎ、12世紀以前を的確に見ることができない。このため霊場化を9世紀にまで単純に遡らせるあやまちをおかしている。重文の円仁金棺さえもがもう少し下る時代の制作であるかもしれない。

以上のように、わたしたちは遺跡とそこに散布（分布）している遺物のある特定の Kategorie でくくることが、資料の絶対量のきわめて少ない山では、その全体像を取り違える可能性が高いので、あえて総括的な名称を提唱しているのである。

3. わたしの研究の具体像

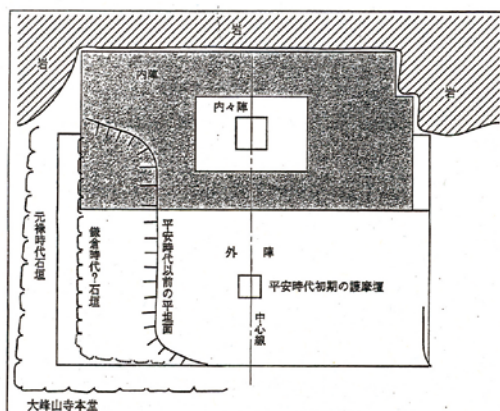
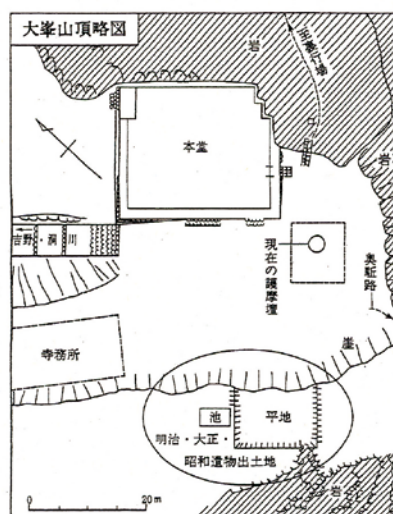
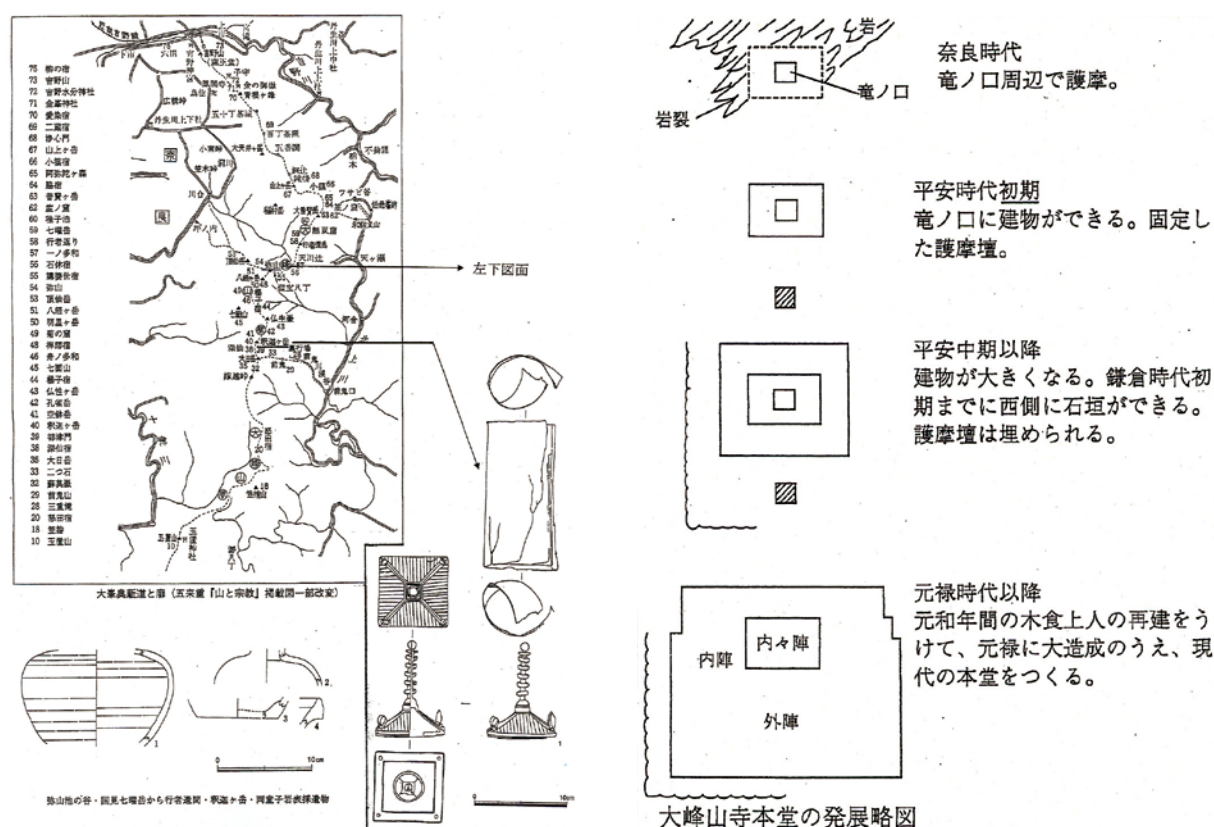
わたしは、昭和30年代前半に、いく度か大峯登山をした。この時に山頂に大量の赤茶けた土器片が散布していることに気づいた。この時は、この土器片がどの時代のものかも知らなかった。きわめて単

純な好奇心のみの記憶であった。現在ではこれらの土器は9世紀末から10世紀初頭にかけて、京都（平安京）で制作された黒色土器であることを知っている。

その後、奈良県遺跡地図の分布調査で大峯山系の北半部分を登山し踏査し、大峯山頂などを遺跡として登録することが出来た。

昭和58・59年に大峯山頂の大峯山寺本堂の解体修理を行なう発掘調査を実施し、結果的に奈良時代から現在までの大峯山頂の宗教建築の変遷を明らかにすることが出来た。

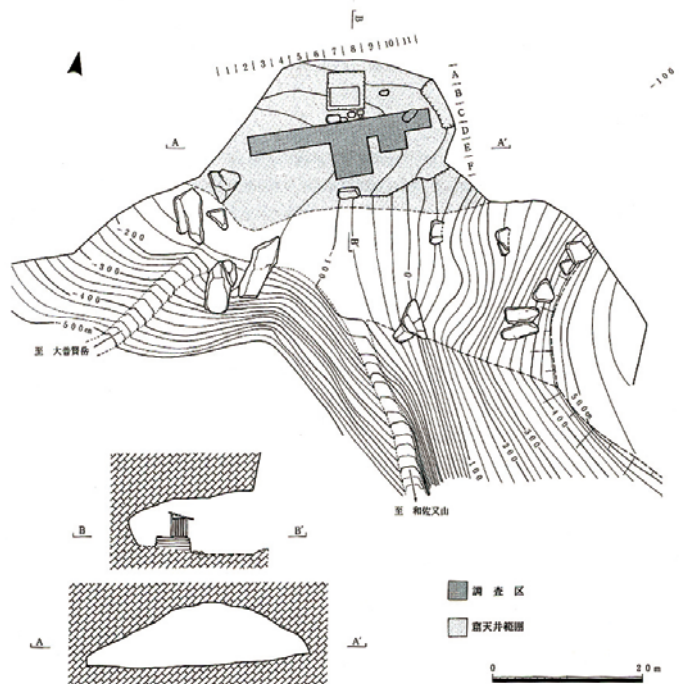
また、昭和61年には、山の考古学研究会を結成し、同時に下部組織として奈良県山岳遺跡研究会を立ち上げるようになった。前者は全国の山の遺跡を再踏査し、後者は奈良県の山を中心として多くの成果をあげている。現在は福岡県宗像大社の沖ノ島は山の遺跡か海の遺跡かの命題を考えている。



奈良山岳遺跡研究会編
『大峰山岳信仰遺跡の調査研究』2003年より



奈良県指定文化財 笙ノ窟 銅像不動明王像



笙ノ窟平面図・立面図 (S=1/250)



不動明王像框刻名 (拓本)

笙ノ窟発掘調査団編『笙ノ窟発掘調査概要報告書』
上北山村教育委員会、1995年より



那智参詣曼荼羅

和歌山県立博物館編集・発行
『熊野三山の至宝
—熊野信仰の祈りのかたち—』
2009年より

第2章

考古学からみた宝満山信仰の始まり

小田 富士雄

1. 宝満山調査の始まり

大宰府政庁の北東に望まれる宝満山（標高約830m）は古来竈門神社の鎮座する霊山である。その秀麗な山容が青空に浮かぶたたずまいは、見る者をして一種荘厳の気につつまれる。『延喜式』神名帳に「竈門神社一座^{明神}」と記載された式内社である。貝原益軒の著『筑前国続風土記』の中で次のように述べている。

「此山は、国の中央にありて、いと高く、造化神秀のあつまれる所にして、神霊のとゞまります地なればにや、筑紫の国の惣鎮守と称す。凡国土には、鎮守となれる山あり。是を鎮山と云。神霊ありて、其国をしつめ守り給へり。（中略）祭る所の神社は、海神の女玉依姫也。^{うがやふきあえずのみこと}鷗鷺草葺不合尊の御后也。日向国高知尾岳にて、神武天皇を産給ひて後、竈門山に入り玉ふたかや。相殿の神二座あり。左は神功皇后、右は八幡大神なり。」（巻之七・御笠郡上）

宝満山の山容は山岳崇拜の対象にふさわしいものである。神霊が山中の巨岩に宿り、また天に最も近い山頂には神が臨降してくるという古代人の思考は、8世紀代の常陸や出雲の風土記からもうかがわれる。巨岩、奇岩の景観に恵まれた宝満山もまた例外ではない。

宝満山の総合調査が企画されたのは昭和35年（1960）8月、同年9月4日第1回会合が長沼賢海・干潟龍祥・西高辻信貞（太宰府天満宮・竈門神社宮司）の発起のもとに召集された。ここに「宝満山文化総合調査会（代表・西高辻信貞）」が発足した。そして遺跡・遺物、文献、民俗、祭祀、石造美術、修験道関係の6部門が設けられた。筆者は遺跡・遺物関係部門に属し、鏡山猛教授のもと調査に従事した。考古学の調査は昭和35年2回、同36年1回実施した。第1次調査は竈門宮下宮所蔵の宝物館記録作成・山中遺跡踏査（10月6～9日）、第2次調査は山頂上宮に近い法城窟発掘・上宮背後の岩棚祭祀遺物包含層発掘・下宮礎石群の測量（10月16～19日）、第3次調査は下宮礎石群の一部発掘（4月5～12日）を行なった。下宮礎石群の調査では8世紀代に始まり、中世に及ぶ遺物から竈門神社に始まり大山寺に至る仏教関係遺跡、上宮岩棚遺跡では8世紀後半から10世紀代に至る神道祭祀関係遺跡であることが明らかになった。これらの経緯は、宝満山に初めて考古学の発掘調査の鍬が入り、世の関心を集めることとなった。しかし諸事情により20年後の昭和57年（1982）に筆者編『宝満山の地宝―宝満山の遺跡と遺物―』（太宰府天満宮文化研究所刊）としてまとめられた。

2. 山頂上宮地区の遺跡と遺物

宝満山の別称「竈門山」の由来は貞享年中（1684～87）に旧記を集めた『竈門山旧記』に、いま中宮跡から上宮に向う途中にある三岩鼎立した「仙竈岩」について、「鼎ノ如三ツ立立タル石有。高さ一丈余三石ノ間一丈、今道にシテ其の間を通ル。爰ヲカマト石トモ竈門岳トモ申也。此石に釜をスヘ湯ヲワカシ玉ウト申」と記されている。

山頂の上宮社祠は巨岩上に位置し、その背後（東面）は切り立った絶壁をなす。ここを10mほど下ったところに西と南を巨岩で囲まれた岩棚状テラスがある。この北側はさらに絶壁をなして下る。地表には土師器杯の破片が散布する。登山者のロック・クライミングの練習地となり土師器や皇朝銭が発見されていた。筆者らはテラスの中央に東西トレンチを設定して発掘した。平坦面で60cmの深さまで、東寄

りでは約40度の傾斜で岩盤まで約1 mに及ぶ。主として土師器杯類が堆積し、その下半部50cmの厚さの黄色土中に稠密な集積がみられた。これらは山頂で祭祀のあと投棄堆積したのであろう。遺物の主体をなすのは口縁から内面に油煙の付着した燈明用に供された土師器杯類で、糸徹底出現以前に位置づけられる。採集資料には底部に「上宮」銘墨書のものがある。このほか碗・皿・蓋も若干あり、須恵器の杯・碗・長頸瓶・壺・灰釉陶片などがみられる。これらの特徴の示すところから上限は8世紀後半、下限は9世紀末～10世紀前半頃と推察された。この後も登山者らに採集された資料を追跡調査して、重要な資料もみられるところから、それらを報告し、あわせて宝満山の初期祭祀について考察を加えた『太宰府・宝満山の初期祭祀』（1983年）を公表した。

これまで上宮周辺で収集された遺物は上述した奈良～平安時代の土師器・須恵器に加えて、貨幣・滑石製品・銅製儀鏡・施釉陶・中国陶磁・仏像・仏具などがある。

貨幣はすべて皇朝銭である。筆者の調査時には表1で示す45枚が知られた。そして848年から890年までの鑄造銭が皆無である点が注意をひいた。このほか滑石製有孔円板・銅製儀鏡・施釉陶（二～三彩小壺・緑釉の皿・壺）などとあわせ考えると、8世紀代に始まる山頂祭祀は神道祭祀であり、その内容からみて、国家型祭祀に近い性格のものであったと思われる。その後仏像・仏具類が登場するまでの間にかなりの空白期を経て、仏教色の強い祭祀形態に変化したことがうかがわれる。以上の遺物からみた分期観をまとめてみると表2のようになる。

3. 宝満山信仰の始まり

これまでの考古学調査や収集遺物を通じて、上宮祭祀遺跡の活動期には8世紀後半から10世紀代に及ぶ古代前半期（第Ⅰ期）と、11世紀後半から16世紀頃に及ぶ古代末期から中世を主体とする時期（第Ⅱ期）が設定できることが知られてきた。前者は歴史神道期の祭祀、それも律令祭祀的性格を示す内容であり、後者は仏教的色彩の強い神仏習合的祭祀の様相を読みとることができよう。さらに一步すすめて前者の内容を検討するならば、まずはさきにも指摘した皇朝銭にみる奉養空白期である。鑄造年で示せば835

種別	和同開珎	萬年通宝	神功開宝	隆平永宝	富寿神宝	承和昌宝	長年大宝	饒益神宝	貞観永宝	寛平大宝	延喜通宝	乾元大宝
鑄造年(西暦年)	和銅元年(七〇八)	天平宝字四年(七六〇)	天平神護元年(七六五)	延暦五年(七九五)	弘仁九年(八一八)	承和二年(八三五)	嘉祥元年(八四八)	貞観元年(八九五)	貞観二年(七八〇)	寛平二年(八九〇)	延喜七年(九〇七)	天徳二年(九五六)
数量	6	4	10	11	7	4	0	0	0	0	1	2

表1 宝満山出土皇朝十二銭一覧
(1983年集計)

分期	貨幣	滑石製品 銅製品	仏像・仏具	施釉陶	中国陶磁	土器		
						土師器	須恵器	黒色土器
1 8C中～末	和同開珎 萬年通宝 神功開宝 隆平永宝	有孔円板 儀鏡				甕・皿 坏a 碗a 脚付盤	瓶・坏a 碗a・b	
2 9C代	富寿神宝 承和昌宝			二彩陶 緑釉陶		坏b 碗b	蓋・皿・盃托 碗c 坏b	
3 10C初～後半	延喜通宝 乾元大宝					小皿a 坏c		
4 11C後半～			懸仏・付属品 仏頭		把手付 水注	小皿 b・c		碗

表2 上宮祭祀遺跡収集遺物の分期

祭祀 分期	遺物分期	貨幣 (皇朝銭)	滑石製品 銅製品	仏像・ 仏具	施釉陶 (国産)	陶磁器				土器		
						中国産	国産	土師器	須恵器	黒色土器		
Ⅰ	A	1 8C中～末	760	有孔円板 儀鏡	三彩陶							
		2 9C代	835		二彩陶 緑釉陶							
	B	3 10C初～後半	907 958		灰釉陶							
〈空白期〉												
Ⅱ	4 11C後半～											

表3 上宮地区祭祀の変遷

(－印は上宮祭祀遺跡、－印は竈門岩付近遺跡を示している。)

年（承和昌宝）から907年（延喜通宝）までの約70年間であり、祭祀の空白としては9世紀後半から10世紀初めに至る半世紀程度であったかと思われる。Ⅰ・Ⅱ期の約1世紀間に及ぶ大空白期に比べれば、小空白期と称してよいものである。以上のような祭祀の流れを整理すると表3のように要約される。

Ⅰ A期祭祀は宝満山祭祀の草創期であり、最古段階の祭祀である。竈門神信仰の起源は、大陸における竈を神聖視して家門の反映を祈る家神として祀る信仰に由来し、それが大宰府の創設期にその東北（鬼門）を鎮める大宰府鎮護の神として国家神的性格を有するに至ったのであろう。祭祀遺物にみる律令祭祀的性格は、7～9世紀代の宗像沖ノ島の第3～第4段階祭祀（半岩陰・半露天祭祀～露天祭祀）とも共通する。遣唐使派遣などの国家的事業や大宰府管内の有事に際して行なわれる国家祭祀の性格が付託されていたと考えられる。『続日本後紀』承和9年（842）7月3日条にみえる筑前国宗像神・竈門神らに祟りを払うべく奉幣使が派遣された記事などはこれを証するものであろう。つづくⅠ B期祭祀では皇朝銭や施釉陶が姿を消し、律令的祭祀が後退していることに気付かされる。9世紀後半以降は遣唐使が廃止され（894年）、新羅海賊の出没が沿海諸国の脅威を増大していた。また国内における天災・怪異もひきつづくなどの世情不安から、国内を鎮静すべく諸社への奉幣が行なわれた。筑前国の国神でもあった竈門神も承和7年（840）の叙位から、式内社に列し、嘉承元年（1106）正一位に叙せられるまで叙位昇格が続いた。Ⅰ B期からⅡ期に至る時期にはこのような背景も考えておくべきであろう。

11世紀後半以降に顕現化してくるⅡ期祭祀は、北部九州では英彦山・求菩提山・国東半島の六郷満山などとも規を同じくする原始修験信仰の草創期ともいうべき時期であった。

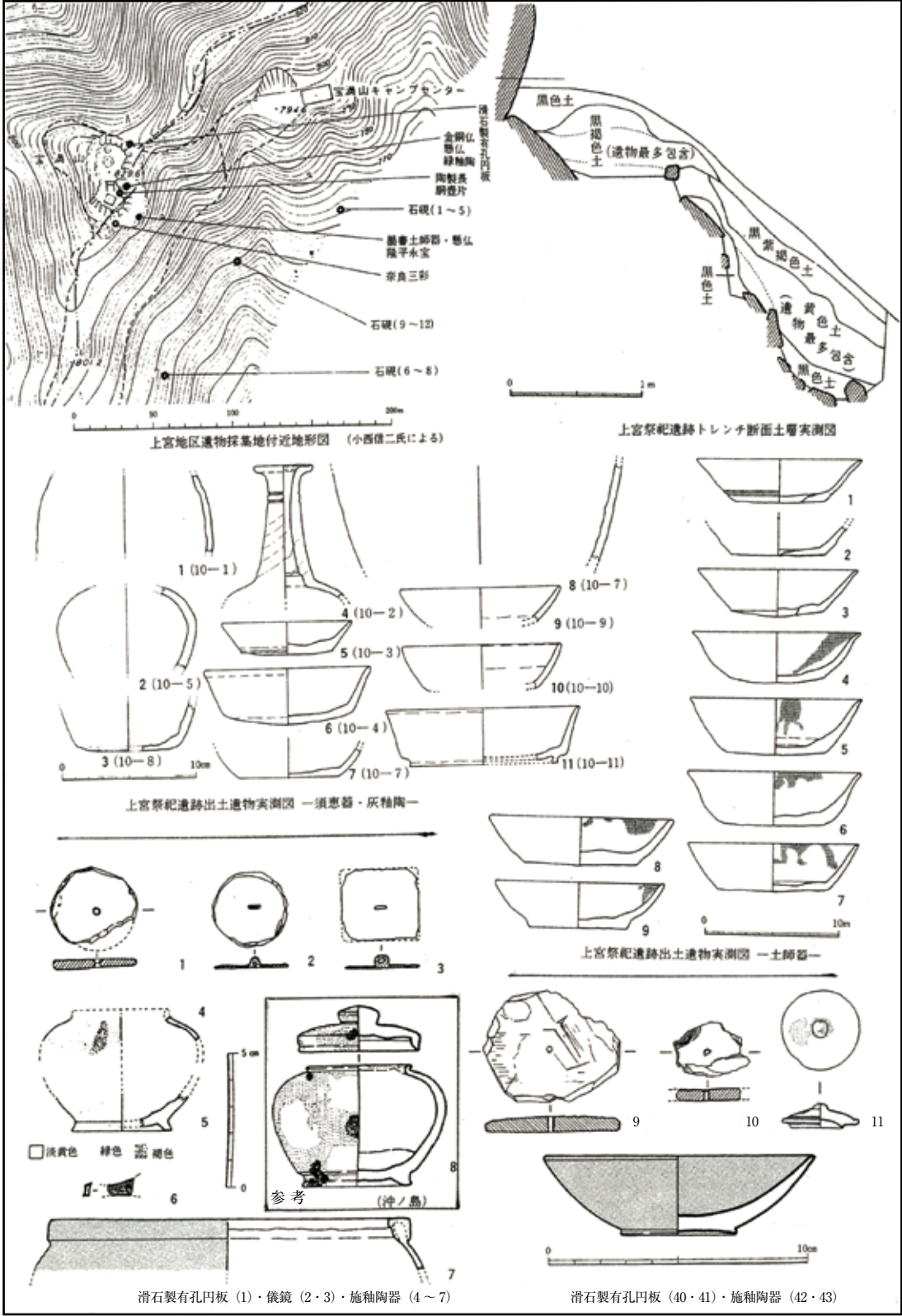
宝満山における仏教信仰はすでにⅠ A期にさかのぼって胚胎していた。下宮礎石群堂舎から発見された8世紀代の鴻臚館式古瓦一組から、史料にみえる竈門神社の神宮寺「竈門山寺」に比定できる。9世紀代には「大山寺」の寺号を有する山寺に発展する。この竈門山寺が全国的に知名度をあげる契機となったのは最澄の参籠であった。最澄は第16次遣唐使船で渡唐するに先立ち、その前年の延暦22年（803）閏10月23日、「大宰府竈門山寺」で、渡海の無事を祈って白檀像薬師仏四軀を造ったと伝えている（『叡山大師伝』・『扶桑略記』）。さらに帰朝後は全国にまたがる六所宝塔の一つをここに建立することを発願したが、その遺跡も最近太宰府市の調査によって明らかにされた。Ⅱ期以降に盛行してくる神仏習合信仰としての山岳修験の隆盛によって、先行する歴史神道祭祀は忘れ去られゆく運命をたどることになったが、考古学調査によってその歴史的推移を再確認した意義は大きいであろう。

参考文献

- 中野幡能 1980『筑前国宝満山信仰史の研究』太宰府天満宮文化研究所
 森 弘子 1981『新版・宝満山歴史散歩』葦書房
 森 弘子 2008『宝満山の環境歴史学的研究』太宰府顕彰会
 小田富士雄 1977「筑前・竈門山寺」（『九州考古学研究・歴史時代編』）学生社
 小田富士雄編 1982『宝満山の地宝－宝満山の遺跡と遺物－』太宰府天満宮文化研究所
 小田富士雄・武末純一 1983『太宰府・宝満山の初期祭祀』太宰府天満宮文化研究所
 小西信二編 1984『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書』財団法人太宰府顕彰会
 山村信榮 2007「発掘調査からみた宝満山について」（『都府楼』39号）財団法人古都大宰府保存協会

- 高瀬重雄 1969『古代山岳信仰の史的考察』角川書店
 宮家 準 2004『霊山と日本人』（NHKブックス990）日本放送出版協会
 大場磐雄 1970『祭祀遺蹟－神道考古学の基礎的研究－』角川書店
 鏡山 猛 1972「日唐交通と新羅神の信仰」（『九州考古学論攷』）吉川弘文館
 重松敏美 1969『豊州求菩提山修験文化攷』豊前市教育委員会
 中野幡能編 1977『英彦山と九州の修験道』（山岳宗教史研究叢書13）名著出版
 北九州市立歴史博物館編 1977『研究紀要1・特集豊前修験道』北九州市
 小田富士雄 1985「豊前求菩提山とその信仰」（『九州古代文化の形成』下巻）学生社
 小田富士雄 2005「北部九州の霊山」（『シンポジウム 山と地域文化を考える 資料集』）第20回国民文化祭越前町実行委員会

広瀬正利 1994『英彦山信仰史の研究』名著出版
 第三次沖ノ島学術調査隊編 1979『宗像沖ノ島』吉川弘文館
 小田富士雄編 1988『古代を考える・沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館



宝満山上宮地区遺跡と遺物

第3章

宝満山の歴史と信仰

森 弘子

1. 神の山

太宰府の東北鬼門を扼して聳える宝満山は、標高829.6m、福岡県の北部中央に南北に連なる三郡山系の主峰三郡山（標高935.9m）から西南方向に張り出した先端部分に位置する山である。そのため見る方角によっては独立峰に見え、その山容は堂々として他を圧している。約9300万年前の白亜紀後期に、地下数kmの深所でマグマがゆっくりと冷え固まって形成された北部九州主部花崗岩類の早良花崗岩が隆起し、浸食をうけて形成された山であり、貝原益軒をして「満山岩石多くして、其形勢良工の削なせるが如し。誠に奇絶の境地也」と言わしめた。古い昔から、人びとはこの山を神と仰ぎ見、分け入っては磐座や尾根の先端などで祭祀を行い、あるいは窟や堂社に籠もっては、ひたすら悟りを求めて修行に励んだ。

この山は古く、御笠山、^{かまどやま}竈門山とも称された。「御笠山」の名はその神南備型（笠型）の山の姿から生じたものであり、^{みくまり}水分の神としての性格を現している。「竈門山」は9合目付近にある三石鼎立した竈門岩によるという説、雲霧が立ち登りカマドで煮炊きしているように見える山容によるという説、大宰府成立とともに道教の竈神が導入されことによるとする説などがあり、「宝満山」は祭神の神仏習合的名称の宝満大菩薩による。山名の変遷がとりもなおさずこの山の信仰の歴史を物語っているのである。

この山に鎮座する竈門神社は頂上に上宮、山麓に下宮、8合目（標高723m）付近に中宮跡がある。延喜式内社、旧官幣小社であり、平成25年に御鎮座1350年の慶賀の年を迎える。『竈門山宝満宮伝記』等の縁起は、この山での祭祀の始まりについて、大宰府ができた時、その鬼門除けのために山頂で八百万神の神祭をしたことによると伝えている。それを物語るかのように上宮が建つ巨岩の断崖などで、古代の祭祀遺跡が発見されている。前掲小田富士雄氏の論考を参照ありたい。

竈門神社の祭神は玉依姫命。相殿に神功皇后、応神天皇を祀る。この山の開山は法相僧心蓮。天武天皇の白鳳2年2月10日、心蓮修行中に玉依姫が示現し、天皇の命によって上宮が創建されたと伝える。また鎌倉期の縁起『竈門山宝満大菩薩記』には、祭神宝満大菩薩が神功皇后の姉であり、竈門上下宮の創建が神功皇后を祀る香椎社の創建と同じ神亀元年（724）であると、両者の深い関係を強調している。これらの伝承は、この山が古く官寺僧などの山林修行の場であったことや、鎮護国家を祈る山として八幡教学のなかで重要な位置を占めていたことを物語るものであろう。これら縁起類には竈門大神あるいは宝満大菩薩にたいして、「九州惣鎮守」、「鎮西鎮守」、あるいは「本朝鎮守」であるとする宣旨等が下された平安末期隆盛の歴史をも記している。



竈門岩

2. 鎮西の比叡山

延暦22年（803）閏10月、^{にっとうしょうやくてんだい}入唐請益天台
^{ほっけしゅうげんがくしょう}法花宗還学生として唐への渡海を志す最澄は、大宰府竈門山寺において遣唐使四船の渡

海の平安を祈って薬師仏4軀を彫った(『叡山大師伝』等)。この山が中央の史書に登場する最初の出来事である。竈門山寺の跡は、鴻臚館式瓦1組が採取された下宮参道南側の南北8列東西6列(7間×5間)の礎石群がある場所だと考えられているが、現在地表に見える礎石は平安後期に整地して再建された講堂か金堂クラス的大型建物である。山中東院谷には江戸初期の絵図に「伝教屋敷」の注記があり、そうした伝承があったことや、山林修行者の居所を意味する「山寺」という呼称と考え合わせれば、さらに広範囲の発掘調査等が必要と考えられる。

最澄は帰国後、大乗戒壇だいじょうかいだんの設置と六所宝塔建立の二大願を発する。六所宝塔は、奈良時代の国分寺・国分尼寺の制に替わって、法華經の功德によって日本国の平安な治国を実現しようとするもので、多宝塔の上層に日本国で書写した法華經一千部を安置し、下層で法華三昧法みとのうがを修して鎮護国家を祈った。設置場所は比叡山の近江国域と山城国域、上野国緑野郡、下野国都賀郡、豊前国宇佐郡、そして筑前国であった。

筑前に建設予定の塔は、最澄生前には場所さえ決まっていなかったようだが、弘仁5年(814)、無事渡海ができたことを渡海前に祈願した神々に報謝するため筑紫に下った最澄は、檀像千手観音菩薩1軀をつくり、法華經一千部八千巻を書写した。三代座主円仁が唐から帰国後半年も大宰府に滞在し続けたのは、最澄の遺志の実現のためではなかっただろうか。円仁は承和14年(847)11月28日から5日間をかけて、竈門山大山寺に於いて、観世音寺講師の助力のもと、諸神に報謝の転經をしている(『入唐求法巡礼行記』)。沙彌證覺によって実際に宝塔が建立されたのは、承平3年(933)であった。その4年後承平7年には宇佐弥勒寺に建立予定であった安南宝塔が宮崎宮に建てられた(『石清水文書』)。内外ともに政情不安な時代、ことに海外の脅威の高まった時代であった。

相次ぐ天台の高僧の来山、そして六所宝塔の建立などを経て、宝満山は鎮西の比叡山ともいうべき様相を呈していった。最盛期、平安後期から鎌倉期にかけて、大山寺、有智山寺は、中国人の「船頭」を寄人として抱え対外貿易をさかんに行之、『兩卷疏知礼記』(西教寺蔵)などの注釈書ももたらされた。法会としては百箇日法華六十卷談義や有智山三十講等が厳修され、台密の祖谷阿闍梨皇慶に両部の大法を授けた慶雲阿闍梨などの高僧が住み、山麓に営まれた別所では経塚造営、民衆教化などの活動が行われ、背振山の彼方を西方極楽浄土と目して往生した僧の名が中央の「往生伝」に散見する。

平安末の一時期大山寺別当は石清水八幡宮の関係者が補されるが、長治年間の都をも揺るがす事件の陣定によって、比叡山の末山と裁定された。そうした中にも九州各地に末寺・末社は増大していった。

3. 金剛宝満

中世に於ける最大の出来事は蒙古襲来であろう。このことによって日本社会は大きく変動するが、宝満山信仰史上に於いても大きな転換期であった。

北部九州の守護職と大宰府の少弐の職を兼務した少弐氏は、宝満山に本城有智山城を築いた。この時期の宝満山に関する史料は乏しいが、中宮跡付近には両界の大日如来の種字を彫った大岩があり、文保2年(1318)の銘がある。その対面には梵字は削り取られているが、元応元年(1319)、元亨3年(1323)の銘のある十一面観音・釈迦・阿弥陀・大日四仏の種字を彫刻したと伝える岩壁が続く、中宮跡には正中2年(1325)に法華經一万部を転読した記念の碑が建っていた(『筑前国続風土記拾遺』)。これらはいずれも蒙古襲来後の



自然石梵字(財団法人古都大宰府保存協会提供)

わずかな期間に造立されており、『大悲王院文書』から知られる雷山の状況、彦山の文書等を勘案すれば、蒙古襲来後の社会不安の中にあって、より強い験力が希求され、宝満山の修験化が図られ、修験の中心道場として「中宮」が開発されたものと考えられる。とともに彦山を胎蔵界、宝満山を金剛界とする入峰の儀軌も整えられていった。

中世宝満山の命運は少貳氏とともにあった。建武3年(1336)、少貳頼尚が都落ちした足利尊氏を迎えに行った留守を衝かれ有智山城が落城した。その後、少貳氏は度々有智山城の奪還を図り、文明3年(1471)には竈門神社に木造狛犬(県指定)を奉納するなどのこともあったが、天正4年(1528)の少貳政興の文書を最後に歴史上から姿を消した。山麓の内山・南谷・北谷に、学問を専らにした衆徒方300坊、修行を専らにした行者方70坊があったという坊舎も、行者方25坊のみとなり、永禄元年(1558)浄戒座主に願い出て、山上、西谷松の尾嶺・東院谷に移り住んだと伝えられている(『筑前国続風土記』等)。

戦国期には大友氏の幕下高橋氏が宝満城に拠った。宝満城は実像の明らかでない「幻の城」とされていたが、近年の研究では、山岳寺院を接收し上宮や中宮がそのまま城となり、麓に内山城、隣峰の愛嶽山に枳形城、頭巾山に頭巾山城など中心を守るべく周囲に城塞を配置した「宝満城塞群」ともいうべき城であったと考えられている。山伏の山上移住は、「大友氏の課役を逃れるため」と縁起は伝えるが、山上は城塞化されており、むしろ大友氏が山伏を被官化し、彼らの住処を城の施設として利用するため強制的に移住させたものと考えられる。このため、宝満山は山も人心も荒廃し、衰微の一途を辿った。

江戸期、宝満山の堂社の復興は福岡藩によって行われた。しかし浄戒座主没落後は山の組織が不安定で、座主が定まらない状況が続いていた。三代藩主黒田光之の時、父忠之に追腹した山伏明厳院秀栄の倅を国中山伏の惣司に任命した。この事に反発した宝満山は財行坊・山仲坊を彦山に遣わし彦山の助力を得ようとしたが、それ以来彦山は、「宝満山は彦山の末山である」と主張し、かえって両山の本末争いに発展した。宝満山は「古来宝満山は金剛界、彦山は胎蔵界、役行者以来双び立ちたる峯と承り候」と主張し、寛文5年(1665)、聖護院の末山となった。

その急先鋒が若くして衆頭となった平石坊弘有である。弘有は天正の兵火に焼失した縁起の再編集に着手し、国学者松下見林の校閲をうけ、五条大納言菅原為庸に本文の揮毫を、外題并和歌は鷹司右大臣兼熙に依頼するという格式高い『竈門山宝満宮伝記』乾坤二巻として成立させた(『竈門山宝満大菩薩縁起』奥書)。本縁起編集の目的は、宝満山が「彦山より格の高い山」であると実証することであり、それ故、内容も伝説的部分は少なく編年体に史実が述べられ、体裁は当代きっての格式をもって整えられた。弘有は戦乱で荒れた山の復興に邁進したが、元禄元年(1688)離山禁錮を命じられ、彦山・宝満山の本末論争は一応の和解をみた。

弘有離山後の宝満山には座主 楞伽院がたてられ、山中二十五坊、筑前一円に組下三十数坊の一山組織が確立し、黒田藩の祈祷社として入峰、雨乞い祈祷などが行われた。入峰修行は修験道においてもとても大切な修行であるが、古来の彦山・宝満山間の大峯(秋峰)修行に加えて、元禄十二年(1699)、宗像孔大寺山を胎蔵界とし、三郡山系に展開する古代以来の寺院等を巡り、帰路は宗像・香椎・筥崎等の古来の大社、博多市中・福岡城内を経巡る葛城峯(春峰)が「再興」された。

4. 明治維新、そして現在

明治初年に相次いで出された所謂「神仏分離令」は、宝満山にとって南北朝期の合戦、戦国期の一山を城塞化した宝満城の戦いに巻き込まれたことにまさる危機であった。明治5年(1872)修験道が廃止され、山伏には離山の命令が出され、吉祥坊吉田広輝一人を祠掌として残し、6年には全員宝満山を離れた。山中では廃仏毀釈が徹底的に行われ、仏教的建造物、仏像、仏具等が払拭され、山伏が手を入れ育成してきた山林は上地となった。

このような時代にあって宝満二十五坊が、座主をはじめとする改革派(廃仏派)9坊と亀石坊を中心

とする守旧派（奉仏派）16坊に分裂したことが、この山の衰亡に拍車をかけ、竈門神社上宮は内山村の村社、下宮は無格社、中宮にあった講堂は神祇殿とされ別社と扱われたが、間もなく廃止となった。福岡裁判所判事として赴任した原田直敦の指摘により、吉嗣拝山等地元の人びとが官幣社昇格運動をおこし、官幣小社に昇格したのは明治28年（1895）のことであった。

古来、人びとは様々な願意をもってこの山の神に祈ってきた。歴史の表舞台では「鎮護国家」を祈ることが中心的なこの山の役割と

して印象づけられるが、庶民の信仰も地下水の如く、この山に息づいている。夏の夜間に山中をめぐる大巡行では、行中 蝗 封じの呪が唱えられたことや、今もなお正月行事として行われる「作試し」は、水分の神と崇められた農耕神としての性格が連綿と続いていることの証であり、4月のえんむすび大祭は、成人儀礼として登拝した十六詣りの流れをくむものであり、女神の優しさを慕う人びとの集いである。

今日、九州一の登山者を集めるといふ宝満山。リピーターが多いのもこの山の魅力故であろう。山に分け入る人々は、意識するとしないとにかかわらず、この山の神の恵みをいただいているのである。

春はもえ秋はこがる竈門山 霞も霧も煙とぞみる

古歌に詠まれたこの山の自然がいつまでも豊かで、人びとに安らぎを与え続けてくれることを祈る日々である。

参考文献

- 中野幡能編 1980『筑前国宝満山信仰史の研究』太宰府天満宮文化研究所・名著出版
 森弘子 2008『宝満山の環境歴史学的研究』（財）太宰府顕彰会・岩田書院
 中西義昌 2002「戦国期筑前中南部における領主権力の動向」『福岡地方史研究』40



宝満山採灯護摩供



宝満山全景（太宰府市高雄から）栗原隆司氏 撮影

第4章

宝満山と古代大宰府

酒井 芳司

はじめに

『^{かまど やまほんまんぐうでん き}竈門山宝満宮伝記』、『^{かまど やまほんまんぐうえん ぎ}竈門山宝満宮縁起』、『^{かまど やまきゅう き}竈門山旧記』など、近世における宝満山の縁起は、^{てん じ てんのう と ぶろう}天智天皇が都府楼（^{だざいふせいちやう}大宰府政庁）を建てた時に、鬼門（東北）にあたる竈門山（宝満山）で鎮護のための祭りを行ったと伝える。宝満山は大宰府がその麓に置かれるにあたって、その鎮護の山となったというのである。

このような記述は古代の文献にはみられない。はたして宝満山は大宰府の鬼門を護る山であったのか。このことを考えてみたい。

1. 宝満山の祭祀と大宰府

すでに考古学的調査の成果から明らかにされているように、宝満山では8世紀の初めから遺跡がみられ、とくに8世紀後半以降の土師器や皇朝^{は じ き}銭、滑石製品が多くみつかるようになる。これらは国家的な性格を持つ祭祀であり、大宰府が置かれたことと無関係ではないだろう（第6部第2章・第5章を参照）。太宰府市大字内山の^{からしの}辛野遺跡では、観世音寺と国分尼寺など寺院でしかみつからない土師器の鉢や祭祀に使われた製塩土器とともに、「神」や「寺」という銘文がある墨書土器がみつまっている。また「蕃」銘墨書土器の存在から、異国を降伏させる祭祀が行われたのではないかという推定もあり、この時期の新羅との関係悪化と関わるのだろう。これまで日々、地域の人びとは、宝満山から流れる河川から農耕の恵みをいただき、宝満山を見上げて信仰していたことだろう。しかし、宝満山は、国防と外交、九州の統治を職掌とする大宰府が行う国家的祭祀の場となり、そこに神社や寺院が建てられていった。それが竈門神社であり、竈門山寺であったとみてよいだろう。縁起が伝えるように、大宰府との関わりが7世紀まで遡るかどうかは確かな史料がないものの、宝満山における国家的祭祀が大宰府の関与をもって開



「神」銘墨書土器 写真提供：九州歴史資料館



「寺」銘墨書土器 写真提供：九州歴史資料館



「蕃」銘墨書土器 写真提供：九州歴史資料館

始されたことは確実である。

2. 宝満山と八幡神

天平勝宝7歳(755)、八幡神は竈門神がわが姨であるという託宣を下した(『宇佐八幡宮御託宣集』)。竈門神社に八幡神(応神天皇)が祀られているように、宝満山と八幡神は密接な関係を持つ。8世紀、隼人征討や東大寺大仏造営の援助を通じて、八幡神は急速に国家との結び付きを強めて成長していく。神亀2年(725)には現在の宇佐神宮の鎮座地に小倉山社が造営され、13～14世紀に成立した宝満山最古の縁起『竈門山宝満大菩薩記』は、神亀元年に応神天皇の母、神功皇后を祀る香椎廟と竈門神社の上宮・下宮が創建されたと伝える。加えて、宝満山の東、豊前方面に向かって、米ノ山峠を越えた旧筑穂町にある大分八幡宮の創建も江戸時代の縁起によれば、神亀3年と伝えられる。宇佐八幡宮のある豊前国から博多湾沿岸にいたるルート上の神社が同時期に画期を迎えた伝承を持つことは注意してよい。

3. 宝満山の神に期待されたもの

7世紀以前、御笠郡地域は、那津から内陸に進んだ場合、664年に水城が築かれた二日市低地帯を過ぎて、肥国(肥前・肥後方面)、豊国(豊前・豊後方面)に道が分かれていく要衝である。御笠郡地域には、物部や大伴部、壬生部、山部など軍事的な部民が分布し、宝王女(斉明天皇)が領有する財部も居住していた。大宰府が置かれる以前から、倭王権はこの九州における要衝の地を掌握していたのである。このような交通の拠点に位置することから、宝満山は、豊前国にあって大宰府との結び付きを強めようとして、今日の筑豊地域に勢力を伸ばしてきた八幡神や、さらにはその母である神功皇后とも結び付き、8世紀後半になると、外敵から国土を護る神として、また大宰府の所在地の鎮護の神として期待され、大宰府によって祭祀が行われるようになったのではないだろうか。9世紀になると、最澄や円仁、円珍などの入唐僧が、さかんに宝満山に渡海の安全を祈るようになる。外敵からの守護が期待されるようになったことから、さらに航海の安全を保証する神としての性格も獲得していったのであろう。

4. 中世における宝満山の信仰と対外交流

中世における宝満山は修験道と結び付き、新たな様相をみせる。蒙古襲来を契機として、外敵に備えて修験道の力への期待が強まり、14世紀頃までに宝満山は修験道が導入され、金剛界の山と認識されるようになる。これに対し、豊前国の彦山(英彦山)は胎蔵界とされた。修験道では神仏習合の傾向が顕著であり、宝満山においても磨崖梵字や懸仏など神仏習合思想を表現した遺物がみついている。また、輸入陶磁器や中国から伝わった経典、中国で制作されたとみられる菊目石(サンゴ)の塊から掘り出された珍しい獅子、近年、九州西部の対外交流の要



大宰府政庁跡からみた宝満山 栗原隆司氏 撮影

衝を中心として分布が確認され、12世紀から14世紀に南宋からもたらされた薩摩塔のうちの一基など、かつての宝満山の盛んな対外交流を物語る遺品が存在する。

しかし宝満山では、14世紀に北部九州を支配する少弐氏の本城である有智山城が南谷に築かれ、15世紀まで有智山城は落城と少弐氏の奪還を繰り返した。また、16世紀には豊後の大友氏により、宝満山は城塞化され、宝満城と呼ばれるようになる。宝満城は高橋紹運が城主に任じられたが、天正14年(1586)の岩屋城の落城と紹運戦死の後、島津軍に降伏し、多くの建物が焼失した。

5. 近世の宝満山と修験道

中世末の戦乱で被害を受けた宝満山は、豊臣秀吉や小早川隆景によって米の施入や建物の造営が行われ、復興されていた。慶長5年(1600)に黒田長政が筑前国を受領した後は、黒田藩(福岡藩)による復興が行われた。近世初頭の宝満山は座主も定まらず、戦国時代以来の混乱が続いた。万治元年(1658)に平石坊弘有が衆頭となり、祭事や法会の復興、講堂の再建を行うなど、復興に努めた。しかし、彦山との本末争論を経て、弘有が失脚すると、福岡藩により座主として楞伽院兼雅が任じられた。その後も彦山との争いは続き、元禄9年(1696)、福岡藩の裁定によって和睦となり、混乱に終止符が打たれた。

宝満山は、彦山を胎蔵界とするのに対して、金剛界の修験の山とされ、近世においては、宝満山の山伏が秋に英彦山に駆け上る峰入り(大峯)、春に宗像孔大寺山を胎蔵界として駆け上る峰入り(葛城峯)、夏に山内を巡る大巡行が行われた。

明治元年(1868)の神仏分離令の布告を契機に、宝満山では廃仏毀釈が行われ、山内の建物や仏像、仏具、経典などが徹底的に破壊された。25坊あった山伏も山を降りていき、後に修験道も廃止された。しかし山伏は地域社会の中で命脈を保ち、峰入りも次第に復興されていった。1982年、開山心蓮上人の1300年遠忌を記念して宝満山修験会が結成され、峰入りが本格的に復興された。2013年は宝満山から英彦山への峰入りも再興され、宝満山も国の史跡に指定されるなど、その歴史を未来に伝える地域の人びとの努力が実を結びつつある。



竈門神社の七夕まつり(2017年8月7日)

参考文献

- 中野幡能1975『八幡信仰史の研究(増補版)上・下』吉川弘文館
 小田富士雄編1982『宝満山の地宝—宝満山の遺跡と遺物—』財団法人太宰府顕彰会
 五来重編1984『山岳宗教史研究叢書18修験道史料集〔Ⅱ〕西日本編』名著出版
 財団法人神道大系編纂会編・中野幡能校注1989『神道大系神社編四十七 宇佐』
 森弘子2008『宝満山の環境歴史学的研究』財団法人太宰府顕彰会
 九州国立博物館編2009『トピック展示 祈りの山 宝満山』財団法人太宰府顕彰会

「此山は、國の中央にありて、いと高く、造化神秀の集まれる所にして、神靈のとどまります地なればにや、筑紫の國の惣鎮守と称す。」

「此山は峯高くそひえ、雲霧ふかくおほひ、烟氣つねに絶えず。故に竈門山と云。」

「満山岩石多くして、其形勢良工の削なせるか如し。誠に奇絶の境地也。篤信かつて諸國の名山を多く歴観せしに、かかる所はいまた見す」

『筑前國續風土記』 貝原益軒

福岡藩稀代の儒学者・貝原益軒は、宝満山の山容と由来を上記のように記している。本記述で繰り返し出てくる「峯高く」は、宝満山の形容として相応しい。下の写真では、左に大野城跡がある四王寺山（標高410m.）、右に宝満山（標高830m）を写している。見る角度にもよるが、宝満山の高さは数値以上に際立つ。宝満山の別名「竈門山」も、北の玄界灘と南の有明海から流れ込む気流が、背丈のある宝満山の山肌に突き当たり、雲霧が発生し易い地理的性質に由来する。

太宰府の人々が宝満山を仰ぎ見る様は、今も昔も変わりなく、まさしく「霊峰」と呼ぶに相応しい。

（小嶋 篤）



四王寺山と宝満山

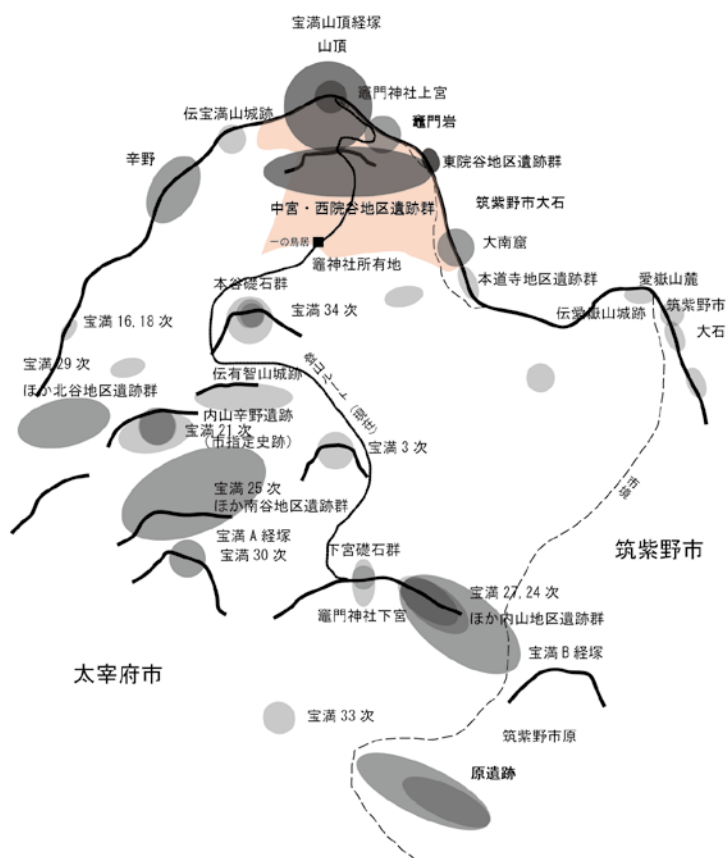
第5章

宝満山の最新発掘調査成果

山村 信榮

はじめに

宝満山遺跡群と称するこの遺跡は太宰府市大字北谷の一部、大字内山、筑紫野市大字原、大石、本道寺に展開する広域の遺跡で、さらに北の宇美町側にも広がる可能性を持つ。太宰府市と福岡県がおこなってきた宝満山での埋蔵文化財の調査は、平成31年2月現在で調査次数は44次を数え、悉皆調査を除く調査総面積は39,714㎡となっている。調査原因は学術調査から農地改良、鉄塔・ダム・道路・博物館建設、宅地建設、土取りなど多岐にわたっている。古くは1961年の小田富士雄氏ら宝満山文化総合調査会による山頂、下宮礎石群、法城窟などの調査を嚆矢とし、1970～80年代には太宰府天満宮文化研究所による遺跡分布調査、地元行政による調査は昭和61年（1986）以降、現在も続いている。近年は開発に先立って、山中の遺跡の状況を把握するための調査が平成17年から5ヶ年間実施しており、太宰府市側の325,000㎡の悉皆調査と作図をおこなった。遺跡の山頂や山中、下宮地区などの一部は平成25年10月に「宝満山」として国の史跡となった。



宝満山遺跡概念図

1. 黎明期の宝満山

内山辛野遺跡や筑紫野市本道寺の東院谷では悉皆調査や平成15年7月の水害調査で遺物が採取されているが、その中に8世紀初頭に位置づけられる須恵器の坏が見られる。8世紀も中頃以降になると、山裾では原遺跡で「菌」銘の墨書土器を含む生活跡が、至近の36次調査では二彩陶器が出土している。下宮地区では瓦を伴った包含層が、さらにその上の内山辛野での21次調査では煮炊具としての甕を含む土器群と整地層が見つかり、その眼上に祭祀遺跡である辛野、山頂遺跡が展開している。その他、下宮から中宮に至る間の独立峰である3、30、34次地点の頂部付近で須恵器の坏や蓋の破片が採取されて

いる。このような状況を総合的に判断すると、宝満山での遺跡の形成は7世紀後半にはじまり、8世紀中頃には原遺跡などの山裾で一定期間の滞在を可能にする生活空間が形成され、21次地点のような山中でのキャンプサイトがそれに連動して展開し、現在の登拝ルート沿いの独立峰の頂部で小規模な土器を用いた祭祀が連鎖的におこなわれて、北西面では辛野遺跡、南西面では山頂遺跡が最大の祭祀場となっていたことが理解される。山頂で出土した墨書土器に「寺」銘のものがあり、祭祀のために山中に入っていた者の中に仏教を背景とした人間が含まれていたことは考えられる。なお、下宮地区周辺での奈良時代の瓦の出土から、この時期に堂舎の存在した可能性が指摘されているが、大宰府系鬼瓦片も出土しており、平安時代に先きだって堂舎が存在した可能性がある。

2. 平安前期

9世紀に入ると遺跡の数は激減する。下宮地区周辺や本谷地区、愛嶽山山頂などで少量の土器が出土するに留まるが、山頂だけは特別で祭祀に用いられたと考えられる土器の大半はこの時期のものである。多くの土器の縁に油煙の跡が残され、闇の中で土器に油を注いで日を灯して巨岩の上で祈りがささげられていた光景が想像される。模造鏡や滑石製の形代、皇朝銭、緑釉陶器などの一連のものはこの際に奉げられたものであろう。墨書土器には、山頂のものに「岳」が、辛野遺跡のものには「蕃」の文字があり、山岳において異国の何がしかに対して祭祀がおこなわれたことが理解される。

9世紀後半から10世紀になると下宮と中宮の中間の独立峰に3間四方で総柱の礎石建物が忽然と現れる。瓦を所要したもので柱の芯心の幅は両外が2.7m、中央が3mの一辺が7.4mのもので山を削り出して作った方形の基壇を伴っている。石で築かれた階段の位置から南を正面とした建物で、北には玄界灘、東には山頂を仰ぐ好位置に立地している。建物の位置から平安時代の様式とされる小金銅仏が出土している。この施設が近年、天台宗を開いた最澄が企画した六所宝塔のうちの日本の西端に置かれた「安西塔」であったのではないかと指摘されている建物である。この時期は、この遺跡を除けば山中では遺跡の形成は極端に少ない。

3. 平安後期から鎌倉時代

11世紀後半になると山中では爆発的に遺跡が形成されだす。内山、南谷、北谷、本道寺地区は現在の段々になった田んぼや畑、宅地の各所で土器が分布し、遺構が確認されており、山の緩斜面を段造成して生活面を次々に確保していった様子がうかがえる。北谷の宝満29次では



宝満30次の経塚埋納坑



宝満34次の
経塚埋納坑と
金銅仏



宝満29次の石垣による区画



宝満21次遠景（南東より）

土地を10数mごとに低い石垣を用いて区画した様子が確認され、その区画の中で鍛冶炉が数基展開して刀剣や鎧などの残片が出土している。内山の21次調査地点では幅10mにわたる鍛冶作業をおこなう作業面が確認され、開発された空間が生活のためのみならず工房を含むものであったことが判明した。この様子は太宰府観世音寺境内の様相と酷似しており、平安後期以降、寺社の坊にたくさんの修行僧や商人や職人が雑居していた様子が復元される。山中が一種の寺内町のような都市的な場となっていた。竈門神社境内の37次で調査した下宮礎石群は12世紀に東西23m、南北32.5mの整地を行った上で建設された礎石建物で、7×5間、23.3×17.8mの規模であることが確認され、太宰府観世音寺講堂跡、宇佐弥勒寺講堂跡に次ぐ九州屈指の建造物であった。おそらくはこの時期においては山内での中心建物であったと考えられる。

宝満B経塚とした筑紫野市大字原字山崎の丘で出土した経筒には天永元（1110）年の銘があり、文書の内容から肥前国松浦郡の僧「観尊」が「大

南 沙門堂」に止宿し修行したことがわかる。この経塚が出土した東側の水田に「ビシャモン」という呼称が残っており、周辺から古代の瓦が出土することから、ここに「毘沙門堂」があった可能性が高い。展開する坊の中に小規模な堂社が含まれていたことがわかる。これら開発された坊から見上げた峰の上に「キョウヤマ」などの名称があり、如法によって聖地となった丘の周辺に聖なる坊や堂社が開かれるというストーリーが描ける。この聖なる丘は眺望として隣の「キョウヤマ」と連鎖して山頂までつながっている。山頂も中国陶器製の経筒が出土しており経塚が形成されたことがわかっている。山頂は同じく経塚のある脊振山頂、英彦山頂などと連鎖して広大な仏教世界を展開していた。これらの山々は水配の山として周辺の耕地を潤し、地域開発にとっては欠くことのできない要所であり、そこをこのような山岳寺院が占拠していた様子が徐々に明らかにされている。

4. それ以降の宝満山

鎌倉時代後期から南北朝前半頃が展開する坊跡のピークと考えられ、内山辛野の21次調査地点では前面に2段の石垣と階段、奥に土塁と枯山水の庭園、数寄屋風建物を備えた館的な建物が成立している。この建物は焼失して終焉を迎えたのち、その上に墓が穿たれている。発掘調査では14世紀後半以降の顕著な生活を伴う遺構の確認が現状ではなされていない。墳墓は内山、北谷地区に存在することから、現在まで調査対象になっていない現在の集落や西院谷や東院谷といわれる山中の近世の坊跡群に重なっているものと思われる。有智山城と呼ばれ



宝満32次の伝「有智山城」土塁

てきた南谷の九重原にある巨大な土塁は、内側に守るべき主たる郭がなく、明時代の染付磁器などが分布することなどから戦国時代後半期の宝満山頂を中心とした宝満山城を防備するための大城戸の機能が付された施設であった可能性が考えられるようになってきた。

このように近年の調査によって、ある部分では新見地が、ある部分では今までの説を覆す所見が提示され、徐々に遺跡としての宝満山が過去を少しずつ語りはじめている。

第6章

宝満二十五坊の姿 ―近世坊跡の平面構造調査―

岡寺 良

はじめに

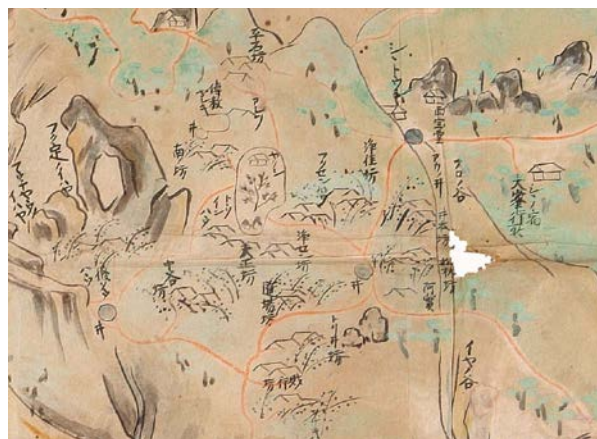
竈門神社に伝わる『竈門山旧記』によると、宝満山の坊舎は元々山麓に展開していたが、弘治2年(1557)、豊後国守護・大友宗麟の検地により壊滅的な打撃を受け、その翌年(永禄元年)、修験を専らとする行者方の二十五坊が、宝満山の山上に坊舎(日常的な居住空間)を構えることになったとされている。これが「宝満二十五坊」であり、明治5年(1872)の修験宗廃止による下山まで、近世宝満山の中心を形成することになる。この「宝満二十五坊」は、座主跡^{ざす}の他、山上の東側に展開する東院谷^{とういんだに}に16の坊、中宮跡の西側、百段ガングの両側に展開する西院谷に9つの坊が知られていたが、その詳細な平面構造についてはこれまで不明とされてきた。

1. 山上坊跡の調査と坊名称の特定

2007～08年、筆者は宝満二十五坊の平面構造を調査すべく、既往図を元に現地調査を行い、座主跡・東院谷と西院谷の坊跡の平面図を作成した。東院谷は座主跡を頂点に、南東側へ下る尾根上を中心に、10m×20mほどの広さで石垣を持つ坊舎の平坦面群が確認された。西院谷もまた、中宮跡を頂点に参道の両側に坊舎の平坦面群が確認された。そしてこの平面図を元にして坊名称の特定作業を行った。坊名称の特定にあたり、その手がかりとなる文献史料として重視したのが『竈門山水帳』である。これは、寛文11年(1673)から文化5年(1808)までの坊の寺内(境内)、山林等の所有財産の範囲を、四囲(東西南北の境界)を明示する形で記載されたものである。また『筑前國続風土記附録』『竈門神社』の項には、境内の施設について順を追って列記されており、手がかりとなった。絵図としては、先程の『筑前國続風土記附録』の挿図(竈門山神社圖)や、江戸時代前期の様子を描いたと推定される『宝満山絵図(東・西)』(福岡県立美術館)を援用した。特に『宝満山絵図』は、東院谷ではほぼ特定された配置で描かれており(写真)、絵図の正確さが窺われた。その結果は西院谷では一部不明確な点を残すが、次頁下段の図示するとおりである。



宝満二十五坊の石垣と参道(東院谷)



宝満山絵図(東・部分)〈福岡県立美術館所蔵〉

2. 坊跡群の平面構造から読み取れること

坊跡群は山中を束ねる位置にある座主を頂点に、他の25の坊が、東院谷と西院谷に並列的に配置されている。中でも特徴的なのは、座主や東院谷坊跡群が主要伽藍である講堂の置かれていた中宮跡よりも山頂側に所在する点である。他の類例として豊前・求菩提山くぼての配置を見ると、座主が坊群の頂点に位置することについては宝満山と同様であるが、中宮（護国寺跡）・上宮（山頂）は、その坊跡群から結界石みそぎばや禊場を隔てて上位に位置し、「聖（＝伽藍）」と「俗（＝坊）」の上下関係を明確に区別しており対照的である。宝満山の「聖と俗の混在」が生じた背景には、やはり弘治・永禄年中の混乱を発端とする山上坊群の成立という特殊事情が考えられるのでは無かろうか。今後、同じく永禄年中に築城された「宝満城」の検討ともあわせて考えていく必要があるだろう。

おわりに —今後の展望—

近年、山岳寺院を始めとする山岳宗教遺跡が、考古学の調査・研究対象として注目を集め始めている。しかし、伽藍を中心とする発掘調査や石塔・墓石等の石造物調査が中心であり、境内全体を包括的に調査検討する段階までにはなかなか至っていないのが現状である。実際、今回判明した宝満二十五坊の構造が、他の事例に比べて普遍的であるのか否か、即断できる状況ではない。今後、他の調査事例を収集し、比較検討に至る段階を創出するのが急務であると言えよう。

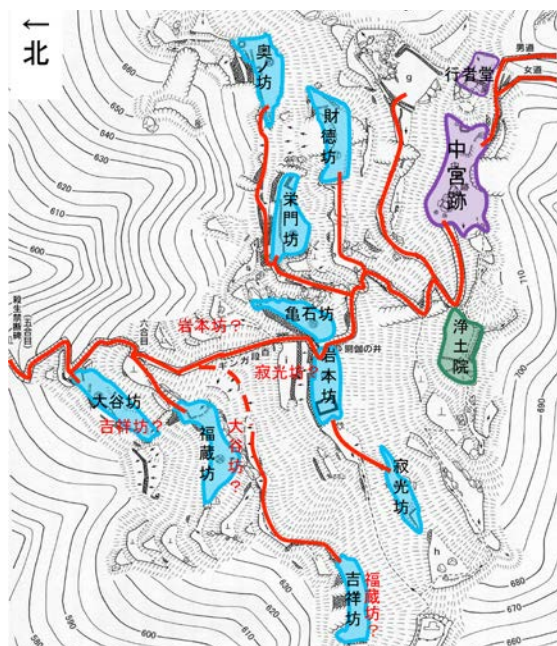
本稿では紙数の関係上、現地での調査方法や、坊名称の特定作業過程などについては割愛せざるを得なかった。それらについては下記の筆者の文献(岡寺2008)を参照願いたい。

参考文献

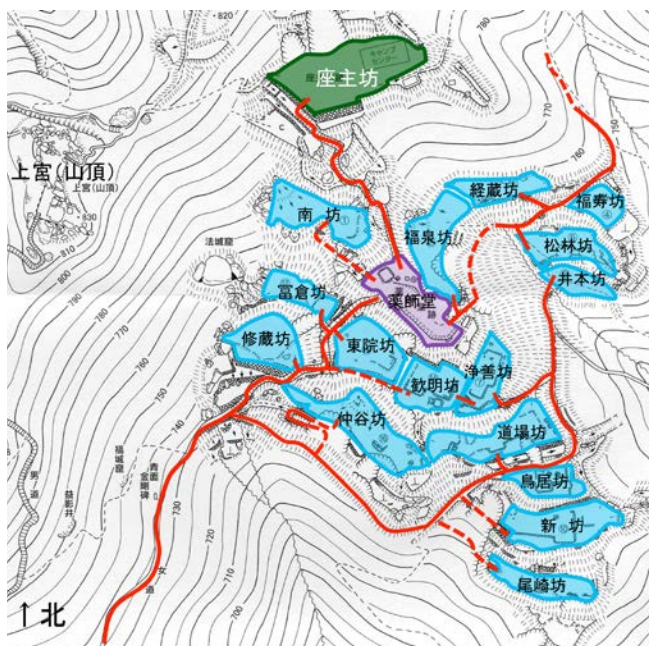
岡寺 良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討―山岳寺院の平面構造調査―」（『九州歴史資料館研究論集』33、2008年）

小西信二編『宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布報告書』（財）太宰府顕彰会、1982年

森 弘子『宝満山歴史散歩』葦書房、1975年



中宮跡・西院谷地区境内平面図



座主坊・東院谷地区境内平面図

※上図は岡寺2008文献掲載図を加工して作成した。水色は各々の坊跡の範囲を示し、座主と浄土院（滅罪寺）は緑、主要堂宇は紫で示す。赤線は主要堂宇及びそこから坊跡等へ続く道を示す。坊名は、「龍門山水帳」基本としながら、明治初年段階のものを掲載した。